

第 5 回 藤枝市子ども未来応援会議

日時 平成 24 年 5 月 24 日(木) 午後 1 時 30 分より

会場 生涯学習センター 第 1 学習室

出席者 委員

大坪委員長、岡村委員、片山委員、金原委員、内川委員、佐野委員、
清水委員、榛葉委員、禰津委員、堀見委員、松永委員、村本委員

事務局

教育部長、生涯学習課職員、教育推進室職員

A 委員 藤枝市の学校の授業について、一保護者として思っていることを言わせて下さい。授業を見させていただく機会が多くありますが、市内の各学校の授業風景が、私の子ども時代に学んできた様子とだいぶ違うなど年々感じています。それは子どもを主体に授業を進めている授業方式が、市内どこの学校にも取り入れられています。

すごく印象に残っているのが、授業参観に行ったとき、学活の授業で先生が舵取りをしながら子ども達にいろんな意見発表を勧めて述べさせている中で、以前に子ども達が自分たちの隣の学級の授業を見るという勉強をしたという話がありました。子ども達から見ると隣の学級は自分達の授業よりも生徒達が授業の流れを作り、先生に負担をかけない授業だったので、自分達も同じようにしたいと言っていました。実際には先生が上手に会話を作っていました、1 時間の授業を見るだけで、自分達で授業を作り上げていきたいというように子ども達の意識も変わりました。

こういう実践が各学校で行われていることを、いろんな場所で見、藤枝市は教育日本一を掲げていますが、本当に藤枝市はレベルの高い授業を行っているなど思っています。

委員長 今日の議題は教育日本一藤枝を目指す教育の基本理念と藤枝市教育振興基本計画の骨子と 2 つありまして皆さんの手元に事前に資料が送られています。

2 つの内容をまとめて意見していただいてもいいのでお願いします。

B 委員 基本理念は、前回の話では学びの環境として日本一ということだったと思いますが、僕らもまだ子どもがいない時には教育のことはあまり考えない。でも、

それでは良くない。企業に勤めている人には子どもがいない方もたくさんいますから、そんな方を中心に企業の方にも少し教育について考えて貰える仕組みづくりもしたい。

資料に「学校と地域ぐるみ」が書かれているが、企業として考えるとキャリア教育の授業に、自分の仕事の話をしに行ったことがあります。社会に出てからの生きる力の一つにもなると思います。そういう所を企業の方にも協力をいただきながら、学びの環境が日本一になるようにやっていくべきではないかと。

委員長 視点として企業側のビジネスということになると思うが、ビジネスというと難しい話になるので、考え方としては日本は産業社会だと言えますので、その産業社会の中で生きていくにはどうしたらよいかと、産業社会の中で求められる能力を考えると提案がいろいろできるのではないかと。

B 委員 企業としても最終的に人材は欲しい。そういう意味で協力する必要がある。

委員長 この話には難しい面もあって、昔のことだが、企業がどういう人材が必要かという話を県立大学で話し合った時には、先生方から強い反発があった。そういう話をするとすぐに癒着などの発想する方が多くて、教育っていうのは企業のためにあるわけではないと言われたことがある。

C 委員 私は反発を受けたとしても、結局は社会が求める人材像になると思う。産業社会だからと委員長もおっしゃいましたが、それを抜きにしては語れない。また、産業界から求める人材と言われることも、以外に妥当なものになるのではないかと。例えば、知的能力よりも常識を身につけて欲しいということは、学校で道徳を教えている先生よりも、会社の社員教育を担当している人の方が痛感していて、なぜ小さい頃にやってきてくれなかったのですかと思うのは、すごく妥当な話だと思う。だから、「社会が求める」という人材の描き方は、私は視点として重要だと思うので、そういう事を受け入れつつも教育ってこうあるべきと譲れない部分があれば、それに沿う形で一つにして主張できれば良いかと私は思いました。

D 委員 B 委員の話を聞かせていただいて、人間像ですが将来社会に出た時の人間像を踏まえて、心の教育とか能力とか育てていければ一番いいですね。ここに書いてある「学びの環境モデル」や「地域ぐるみの教育」は本当にいい事ばかり出てきているので、これをどうやって実践していくか、その次のことになり

ますが、こんなたくさんをいっぺんにはできないので少しずつ考えたい。

E 委員 この骨子案は、どなたが作ったのですか？

委員長 では、事務局の方から骨子案の趣旨を簡単に説明してもらえますか。みなさんがどういう話をしたいらいいか、ガイドラインとして。

事務局 資料の説明をさせていただきます。

最初1つ目の資料に第3章 教育日本一藤枝を目指す教育の基本理念ですが、一番初めにこの会を立ち上げる時にお話をさせていただきました。この会議の目的でもあります藤枝市ならではの教育を進める為に、今年度の3月を目途に藤枝市の教育振興基本計画を作成いたします。皆様が協議なさっている「教育日本一を目指した取り組み」、「藤枝ならではの取り組み」をどうするのかについて、前回までの話し合いを伺いながらまとめたものが基本理念であり、藤枝市教育振興基本計画（藤枝教育プラン）骨子案の第3章になります。

第1章は計画の策定、第2章は現状と課題ですが、現状と課題については前回のご意見の中で藤枝は現在も素晴らしいものがあり、そういう強みをもっと前面に打ち出し、その強みを一層伸ばす形も大事だという視点もいただきましたので、第2章には強みも入れながら現状と課題の分析をしたいなと思います。

特に第3章の部分は、皆様にお願ひして1回目から4回目まで、多くの時間をかけて、教育日本一の姿はどういうことなのか、また子どもに身につけたい力とは、今後10年先の社会を見据えた上で、どんな力をつけることが必要なのか、その話し合いの内容を事務局がまとめて、藤枝市として、この方向で出してみたらどうかと言う提案をさせていただいているところです。ですので、その部分が叩き台になってくると思います。

第4章の部分では、これからの藤枝の教育について行政としての施策案を、皆様のお話を聞きながら、作り始めているところです。

本日は特に日本一の理念について、事務局がまとめましたものに、まとめ方で違うと思うことや補足が必要な部分、表現の仕方などについて、十分叩いていただければ、より良いものができると思いますので、皆様が考えられている事が、ここに反映されているか、方向性として事務局の捉え方が間違っていないか、ご指摘お願いします。

F 委員 この3ページにわたる理念の中に確かに今までのことは入っているが、理念ならもっと端的にしたい。これが計画の最初に書き込まれて、市民の皆さんに知ってもらおうように啓発していくわけですから、この文章の前に短く一言でまと

めるような感じにしたい。

これはただ前回言ったことを短くまとめている説明文という感じで、藤枝の教育日本一の理念がこれだけ読むと、どこの学校もどこの授業もやっている事だなんて、散漫に見られるじゃないですか？

これでは藤枝の教育日本一って何かというのは思い浮かべられないと思えますけどね。もっと叩いて端的な文章にしてくれないと響いてこない。

委員長 読んでピシッとする、感動するような感じですかね。

F委員 そうですね。ああそうかって感じが欲しい。読めばその通りだと分かるんですけど、藤枝の教育日本一とは何かが分かりにくい。

C委員 まったく違う話になってしまうかもしれませんが、具体的な場面で、これは藤枝の教育日本一みたいなのを考えてみれば案が出てくるのではないかな。例えば、月曜日に金環日食がありました。金環日食を学習の題材としたら、それにどう関わるかが学びの姿だと思います。

藤枝市は市内の各小学校に子どもさんを早く集めたようですね。みんな学校で見たのですよね。私は市外に住んでいて、子どもの学校では登校を1時間遅らせ、対応は各家庭に任せるとされました。その為、家では観察用メガネを早いうちから用意し親子で観察しました。その際、親の方が説明するなどの観察意識がないと子どもは見られない。

親子で一緒に観察してみて、今回の金環日食をどうやって見るのが学びの材料として考えた場合に一番良かったのかと思った時に、学校に子どもを集めて子どもだけが観察し、その自然の不思議な様子を子どもだけが感動すればいいのか、大人も一緒に宇宙の神秘を感じる事が、その人の人生にとって良いのかと考えると、金環日食にどう教育行政が関わったら一番良かったかを悩んでいて、藤枝はどう取り組んだらみんなに「すごい」って言って貰えるのかを考えると藤枝が目指す姿が金環日食に限られちゃいますけど、見えてくるのかなと思う。

子どもだけで観察か大人を含めて考えるのか。例えば、行政が強力に押し進めるとしたら、安全性の高い金環日食用メガネを全戸配布するなどを行っても良かったじゃないとか、会社も金環日食の時間帯は休むとか安全面を考えて車を走らせないなどの取り組みはできたのではないかな。そこまでの力があるかは、別にしても取り組みとしての案は出せたかなと思う。ある場面を考えて、その取り組み方が「わっすごい」って思える取り組み方を一つでもモデルとして出せたら、それは藤枝らしさになる。それを、理念を長々と説明する代わり

に一つ出せたら、端的に示すということになるかなと思ったのですが、イメージできるものがあるといいですね。

私は金環日食に関して言えば、もっとみんなで観察できたら良かったと思う。勿論、学校で理科の先生がちゃんと教えてくれる中で見ることも良いとは思いますが、子どもと離れた親は金環日食を見ることもしないことが多かったと聞く。藤枝は残念ながら観察できなかったですが、私は親子で観察し、子どもの興奮の仕方や集中力も見られ、楽しく観察できた。

委員長 会議が始まる前に少し議論したのですが、この会議でもずっと、何をもって日本一とするか議論してきましたが、「数字じゃなくて、みんながこうありたい、あるべき姿をこの会議で具現化していくって方法の方が本当はいいじゃないのか」と。日本一って言うと数字的な議論になる。あらゆる人と議論して日本一を考えると非常に難しい。だから、ある姿を見て「あれは日本一の教育のモデルだなんて思える」そういうことなのだなって意を強くした。見た人が「あれが本当の教育だな」と「あるべき未来の教育の姿、モデルが藤枝にはあるな」と。

G委員 骨子案を見ての感想は非常に良くできていると思いますが、全てのことを網羅していますよね。逆に言うと落ちが無いように、落ちが無いように作られているということは特色が無くなっていく、どこに力を入れているかハッキリしない。逆に日本一っていうのは特色があるってことかもしれませんね。

藤枝の教育はココに力を入れている。それは学校教育であったり、家庭の教育・地域の教育だったりするが、例えば、学校教育を一番に持ってこないというようなこと、一番力を入れているのは地域の教育だというような書き方をしないと。

これを読んだ時に「藤枝はすごく考えているな」となるためには、階段で言うと飛躍が必要だと思う。我々が生きることのない未来を生きる子ども達の為の計画ですから、そうすると、現在に繋がる未来ではない。1段も2段も跳んだような時代を子どもたちは生きていく。けれど、僕らは経験したことを元に考えているわけで、それはあまりたいしたことにならない。今の良さも続けられるけど、今の欠点も続いていくっていう事になる。

今、具体的なアイデアがあるわけではないが、この計画の中には、どこかで1段・2段と跳ぶ部分が必要になってくる。すべての事を網羅しようなんて考えない。独創的であったり、創造的な子ども達を育てるためには計画そのものが独創的であり創造的である必要がある。

この骨子案は、常識的に作られている。何をどうするかは難しいが、うまく

特色を出して、どこに力を入れているのかを明白にすると日本一に繋がるかなと思う。僕はこの学びの環境モデル藤枝を支える力を1・2・3と発想でいえば1の「学校の教育力」から始まるのが常識的だが、あえて3の「地域の教育力」が一番難しく力が入りにくいと思うので、そこから実行していくのも一つの手かなって気がします。

H委員 この教育振興基本計画を見て、15項目も策が書いてあって、全部できたらすごいだろうなって、でもできないだろうなって感じですけど。

教育とは何だろうと考えた時、子どもが社会に出た時に人に迷惑かけないで自分の能力を発揮して、人や社会の役に立つ人間になって欲しいと思い、私は自分の子ども達を教育しています。いろいろ考えると、子どもに望む「問題解決能力」や「創造性」や「人間性」っていうのは果たして、今の日本人・世界中もそうですけど、大人はどれぐらいできているのか甚だ疑問です。

朝、電車に乗って来たのですが、降りようとした時に、降りる人がたくさんいるのに、大人が先頭を切って乗車してくる。それに続いて高校生が乗車する。空いている席に座りたくて周りを見ずに空席に向かって乗車してくる。それでいいの？電車に限らず、そういう事が、ものすごくいろんなところにある。

電車から降りて階段の上り下りする時にお年寄りが重い荷物を持っていたら「僕が持っていきますよ」と恥ずかしいかもしれないが、一言声をかけて持ってあげられる人であって貰いたい。自分の中では、それが当たり前だと思う。

教育日本一の姿の中に、議論の中でもずっと出ていますが、当たり前のことが当たり前に見える子どもと書かれています。当たり前のことが当たり前に見える大人がものすごく多いです。だから、子どももできなくて当たり前。それこそ当たり前なのです。

例えば、難しいこと考えずに最初はおっと気楽にやればいいんじゃないかな？藤枝市民が考える当たり前のことはこういう事です。そして当たり前の事を日本一に当たり前にする「藤枝教育宣言」みたいなのを、「当たり前の事ができないのは、恥ずかしいじゃない」と市民みんなに問いかけて「電車では化粧はやめようよ」とか、肩に力を入れなくても言い合えるような藤枝市っていうのがあったら教育日本一だと思う。

委員長 教育日本一ってココに書かない。当たり前の事を言ったら日本一になれるってことですかね。

H委員 それは当たり前の事を当たり前にする宣言で。日本一・世界一、今は当たり前だと思われてないかもしれないけど、藤枝市民が考えた当たり前のことです。

靴はちゃんと揃えとか、それが本当にできていると美しいと思いますよね。

委員長 この前の島田市の震災ガレキの焼却問題はショックでした。あれは教育の問題だと思います。物凄い反対運動でしたね。みんなで憐みだとか絆だとか言いながら、自分の所だけが良ければいいということですよね。私は教育で助け合いや自己犠牲を習ってきたので、とてもショックを受けました。「絆」をみんなが取り上げるのは、日本人に「絆」がないからだと感じました。

私は酷いなと思ったのに、教育界の人もマスコミの人も、誰も酷いとは言わないですよ、不思議でしょうがない。皆で自己犠牲を払っても日本人同士困っているなら助けるべき。本当は福島の人はずっと酷い目にあっているのだから、復興でお金集めることも大切だが、精神的な助け合いも大事ですよ。あれは教育の問題ではないのですか？

反対したのは親ですよ。自分の子どもだけが良ければ良くて、他の子や人は助けない、誰もその事については言わない、あれは教育界の大きなテーマではないか。

H委員 今は、日本だけじゃなくてヨーロッパを見てもそういう流れですよ。

F委員 東北でも、被災した海岸周辺地区の住民は、あまり縁のなかった山沿いの地区に建てられた仮設住宅に移ってきたわけでトラブルも起きています。一つの自治体の中で溝ができてしまっているようです。

ガレキの処理も、民間業者はかなり高い処理能力を持っているという声は少なくない。しかし、積極的に活かそうという発想は政府にはないようで、現地にもっと処理施設を作ればガレキ処理はスムーズにいくはずだが、それもやらない。

E委員 ごみ処理については、藤枝市は能力的に受け入れができない。

現状の灰の処理にも困っている状況で、他の所からそれ以上のガレキが運ばれても処理できない。生ゴミのみを集めて肥料を作ってもらうなどゴミを少しでも減らしている状況なので反対以前の問題ですよ。

委員長 それでも、昔は助け合ったものですよ。

ショックですね。島田市の反対運動では、静岡市にまで毎月反対しきり来って来るそうです。

教育の問題で言うと、隣人愛とか自律自愛とか自己犠牲とかを私は教わってきた。

C委員 それは、言い方が悪いですけど委員長が戦前のお生まれだから。戦後はあまり自己犠牲を言わなかった。思いやりとかは言われていたけど、その前に自分の主張や権利を表現することがすごく言われた。

事務局 今、委員の方が言われました焼却灰の話ですが、藤枝市では焼却した灰を最終的に処分する場所がないため、他の県にお願いしているところ。その処分をお願いしている地域の方が、震災ガレキの処分灰が入ったものは受け入れられないということです。焼却の能力はあるとしても、最終処分ができないということです。

H委員 さっきの話の続きですが、去年からこの会議で話している「当たり前」の定義をしたいなって思います。人によってだいぶ違うと思います。

電車の中で化粧をしても良いって言う人もいれば、化粧は良くないって言う人もいる。自分としては、良くないと言う人が多いとは思っていますが、電車の乗り方を見ていると、どうなのかなと今朝、思いましたね。

I委員 私も資料を読ませていただいて、ここでの論議をここまで良く整理して下さったと思います。説明文になってしまっているということはあるが、例えば、人間をどう見るかって言った時に、「可視化や数値化ができない様々な側面を含め、次の世代を担う人間力を備えた人材育成の為」って、ここでの論議の中で、ある一つの間像が合意されているわけですね。

G委員が言われたように子どものことを考えた教育って、昔は家庭の教育力がしっかりして地域もしっかりしていました。学校教育も座りましようから始めるじゃなくて先生が授業をやれば集中したといういい時代だった。

今は、変わってきたって言う中で家庭の教育力・学校の教育力・地域の教育力が隣り合って密接している真ん中に子どもがいるのだろう。すべての大人が子どもに目を向けて健やかな育ちの土壌を作ろうって言うのが、この合意かなって思っています。

私は市外に住んでいますが、藤枝が一番違うと思うのは、地域の教育力が高い。幼稚園の周りには、巡回の人が居て子どもたちの為に反射服を着て声をかけてくださる。その人達の存在が子どもにどんな意味があるのか。

例えば、地域の教育力が崩れた時に「そんなことしちゃダメだよ」って言う前に警察に連絡がいく。万引きしてしまった時に、昔はそこで怒って貰えた。地域の中で、こういう教育をして貰って育った子どもの心には、人から言われて自分の身を変えていける力が自然に育っていく。

地域と家庭と学校教育がトライアングルでくつつくモデルを作るっていうのは、たぶん日本ではなかなかない。きちんとこの中で子どもを育てようってことだと思った時にこの骨子案を読むと、私たち発言した人の責任かもしれないですが、普通の月並みの枠組みになってしまっている。申し訳ないですが、特別支援教育・幼児教育・学校教育という分け方じゃなくて、例えば、特別支援教育の子ども達が「ありがとうございました」と交流をお願いしなければいけないのではなく、学校はもっと違う提案していきたい。

資料の中の「学校の教育力」の学校とは何かと言うと、これを読むだけでは小学校と中学校しかイメージしない市民がほとんどだと思います。学校教育法の基本でいうと幼稚園から言っているし、高校も大学も入るし、今で言えば保育園も社会福祉的な意味ではない教育力を持っている。0才児からのスタートと言うならば、ここの定義と言うか、言葉を考えてほしい。

学校教育は文字教育ですが、幼児教育は遊びです。遊びと文字でやる教科学習の重みは同じです。そういう概念をここで共有すれば、新たな提案や実践が見えてくる。

H委員が言った「当たり前」は本当に「当たり前」だが、みんなの認識が全く違ってきている。「当たり前」の論議をするだけでも、藤枝市の教育の質を考えるみたいになるわけで、学校教育を言うなら「学び」という教科教育だけではなく、その前の「遊び」が大事って事を謳い上げるようなことをしないと。

新しい視点や独自性、新しい藤枝の教育システムは「遊び」と「学び」をくつつける。学校教育に困らないような幼児教育をする事じゃなく、遊びを十分にできた子は、しっかりとした考えを持てたり、人の痛みを分かたりする子になるはずなので、そういう新しい発想がないといけない。特別支援に行っている子どもたちが、全体の子どもの数パーセントだから縮こまっているのでは無く、逆にそういう子どもたちを教育の中心に置いたらどうなるかって発想がすごく必要なんじゃないかなって私は思います。

委員長

できるだけドラスティックな発言、天の邪鬼的な発言があると分かりやすいですね。我々は、正解らしいものを一生懸命に議論しているだけで、実は正解じゃないかもしれない。21世紀は、まったく違う世紀で今までと違う、想像がつかない時代が来ていると思うのです。ちょうど明治維新の時の日本みたいに。でも、みんな戦後の社会構造や考え方の下で21世紀を見ているのじゃないかと私は思っている。私は全く違うと思いついてるので、私も危ないかもしれない。しかし、新しいものを作ろうとすると大体そんなもの。新しい教育とは、何なのかってなりますよね。

J 委員 私も基本理念を見させていただいて手を加えてみました。説明文だってお話がありましたが、中段にあります「子どもの笑顔が溢れ、どの子も夢や希望に向かって生き生き生活している。子どもはもちろん、大人も学び合い、支え合いができています。」の「子どもはもちろん」というところを「子どもを中心に」などに置き換えて書けば、それが理念の中心になるだろうって思いました。

いろいろ説明が書かれていますけども、教育日本一については「教育といえど藤枝」という言葉は大事だと思います。それと、「教育の可視化とか数値化が出ない様々な側面を含め」、「次代を担う」と言っている方がいいか分かりませんが、「人間力を備えた人材」。

「生き抜く力」についてですが、日本はこういう教育を目指していますという英語の論文を OECD で発表した中で「ability to survive」という言葉を使っています。サバイバルは生き抜くですが、人を蹴落としてまでって意味もあります。厳しい言葉ですが、今、用いられている言葉ですから、それもいいかなって思う。そういう方になるべく短く詰めれば、だんだんとイメージがハッキリしてくる。

言葉は難しい。知的障害の分野で糸賀一雄先生が、「この子等に世の光を」を「この子等を世の光に」と「に」と「を」を入れ替えて表現されて、大変聞く人に感動を与えてきたなんて逸話になるくらい、言葉の持ち方って言うのは難しいが大事で、意味が全く違ってしまふ、本質さえも変えてしまふ力があります。

それから当たり前のことが当たり前にできるってことですけど、道徳っていう部分とマナーっていう部分とでは、いささか違う部分がありますね。ここにも「道徳的実践力」ってありますけど、文科省が言っている「道徳的実践力」っていうのは心情を養う、心を養うって言うところに中心がある。実際にやるのは「道徳的実践」ってはっきり言っているわけですから、そこら辺をきちんと整理していく必要があるのかなと思います。

K 委員 日本一って言葉に囚われていくと、日本一と言って憚らないものを目指さなければならなくなって、視野がどんどん狭くなってしまふというのが一つ。

自分に身近な事で考えると、本校で日本一を目指そうとすれば何かなって考えている訳ですが、教育の基本として、皆さんが言っている人づくりです。

本校においての人づくり、どんな人にしたいかという、自立と貢献できる人間に育てたいと思っています。障害がどんなに重くても、そのお子さんが家庭の中で一日元気に過ごして、ほんの少しでも笑顔を見せてくれれば家族の中に生きる勇気や喜びを与えてくれる、これはその子が自立していることでもあるし、家族に貢献しているってことにもなる。本校に通っている他の高校生と

レベル的にはほとんど違いがない子どもには、本当に文字通り社会で自立し経済活動をして、就職して地域に国に貢献する、そういった人材を作るそんな思いです。

どうやって育てるかなって言うと本校も全く同じです。当たり前のことを当たり前と言うのは、みんなが同じで私はもっと平たく言って真っすぐ育て欲しいなって思います。力を真っすぐ伸ばして持っている小さな力を目一杯輝かせるように、そういう人に育てることができれば、本校の教育は日本一だと言っていいじゃないかなって。

日本一って言うのは何かと比べてあんだのころの教育は日本一って言って貰うではなく、自分たちが誇りを持てればいいのではと思います。また考えさせてもらいます。

F 委員 子どもにとっては、教育も考え方も自立することも原点は遊びだと思う。特に幼少期や小学生。

これでは行政が書いた押し付けみたいな教育をさせるっていうことになってしまう、そうならざるを得ない面はありますが。自ら生き抜くことという言葉が理念になるものですから「遊び」って僕は大事だなって、どういう言葉で言っているか分からないですが。

I 委員 教育って言葉を聞いた時に、世代によって、特にご年配の方は学校教育って考えてしまう方が多いと思います。2003年ぐらいに、国が子育て支援策の中に企業も子育て支援をしていきましょう。これからの日本の子ども達はみんなで育てるべきと施策が出ています、まだ上手くいかないのですが。

行政が教育を語るには教育委員会だけが考えるのではなく、企業の人や地域の人など、いろんな人たちが「子ども未来応援委員」となって、それも1年間で全てを話し合うのは難しいので、行政の中にみんなで画期的な事を考えていきましょうというような課があるといいなと思いました。

E 委員 やっぱ親は、子どもが社会に出て、社会に貢献できる人になって欲しいって思いが強く一生懸命育てる。その為には、小学校から勉強していい大学に入らなくては行けないって発想になり、塾に入れたりとか勉強じゃなかったら音楽の道やスポーツの道に進ませたいって教室に行かせたりとかして、すごく一生懸命やっていると思います。

幼稚園の間は子ども同士で遊んだりして、いざこざの中から学んだりするけれど、小学校の段階になったらもう遊ばない。塾に行ったり習い事をしたり。遊ぶって言っても小学校の校内で、遊びといじめが混同してしまっているかも

しれない。短時間に少し遊ぶならゲームの方が簡単だからと一人で遊んでいる。遊びが変わってきている。世の中が変わってきている。だから私たちの発想ではついていけない。昔はこうだからって考えは捨てなきゃダメだなと思うけど、なかなか先の事を考えるのは難しい。

今はメディア社会になっていて、子どもはパソコンを自由に扱えるようになり、パソコンで遊んでいる。友達ともメールのやり取りが多くなって、コミュニケーションという意味で対応能力も落ちていると思う。そして、言葉の能力が弱い為にメールでは受け取り方の違いで思いが伝わらなくて、結局コミュニケーションが取れずに、友達関係が崩れたりして学校にも行けなくなってしまったりしている。

それぞれの親も子も一生懸命頑張っているのに、なぜか上手く噛み合わない。私たちがここで子どもの為に、どうしたらいいかって考えているけど、私は過去の経験からでしか物事を考えられないので先のことがなかなか考えられない。だから皆さんはすごいなと思って聞いていて、I委員の話聞いて、ちょっと自分の考えは古くなって思いましたし、骨子案を読んでも全然ピンとこない。私たちが今まで話したことですが、全然イメージできない。

さっきC委員が金環日食を言われた時に、それだったらイメージできるかなって感じがして、自分の子も中学校入ったばかりですけど、早く学校に行ってもいいし、家で観察してもいいよって事でしたけど、友達のみなどと観察したいから学校に行きましたけど、今思えば子どもと観察しても良かったかなと思いました。

日本一と言うと、先ほど言われた他と比べずに自分たちの自己満足でも、これが日本一って思えば、それでいいと思う。考えてみたら藤枝市は、いろいろ実施しています。最近も私の地区では、幼小中でノーメディアディを作って、月1回第3日曜日に、みんなで家読しましょうとか読み聞かせをしましょうって、地域では刻々と何か新しい事を始めてきている気がします。

委員長

日本一って言葉を使うのはいいと思うのですが、必ず批判が出ると思います。そうした議論が起こった時に、議論に巻き込まれないようにした方がいいですよ。教育の現場では、何とか1とかNo1とか世界一など、数値だとか合理的に表現できないものはやらないですよ。やったら困るわけですよ、科学の分野では。教師にもそういうことやってはいけませんと指導している。世界一って言うならば何をもって世界一と言うのか客観的なデータが出ましたかと必ずやります。

皆さん広告のジャロって聞いたことありますか？私はずっと長い間ジャロの審査委員長をやっていました。日本のチラシほど、めちゃくちゃなものはない

ですよ。日本中のチラシを作っている人に指導してきました。「地域一番とは何が一番ですか?」、「30%安いとは、何と比べて安いのですか?」と。

10%OFFって、実は10%高くしてあるかもしれない。商品によっては古くなったものが10%安くなるのは当たり前です。そういう議論を社会ではずっとやっているのです。難しいですよ。

そういう事やっちゃいけませんよって教育する立場の人が、心情としてはわからないではないけども、日本一ってというのがどうかなって思うけど。

数字でものを言う時は注意が必要です。日本一も数字ですからね。外部からなんか言われてもいいと、争いや議論になってもいいという覚悟があるならいいですよ。

F委員 　　だから注釈を加えるような、数値とかそういうものじゃないと上手く伝えるものがほしい。もちろん日本一を目指すのだけど、それは10年20年30年長く続くところを目指しますと。それは当然、注釈としてではなくても出てくる内容だと思うが。一朝一夕にできるものじゃなくて、長いスパンをかけるものだよとしないとダメですね。

委員長 　　日本一って思われる様な、教育のモデルを教育の歩みを作るとか。21世紀の静岡県民を育てるのに日本一と思われるようなモデル。それなら問題ない。

F委員 　　目標とか目指すって言うのをどういう風に表現するか。目指す先を上手くイメージさせるような。

C委員 　　やっぱりこの計画の時に日本一って説明しなきゃいけないですよ。こんなに言うなら日本一外せばと思うけど、上位計画に「4つのK」として入っているから、外すことはできないのですよね?

教育振興基本計画を作れば、それは総花的になるはずですよ。教育の基本計画だから。その総花をやめていいかどうか?私たちがここから進むにあたって、教育振興基本計画の位置としては漏らさずに作らなければいけないし、そうすると全部言っちゃったから特色がないからやっぱり藤枝ならではの、とすると、そのジレンマの落としどころをというところまで私たちが議論しているのですかね。

委員長 　　いいでしょう。

F委員 　　これまでの会議で「文科省の指導要領は押さえておいて」というような話も

ありましたが、本当はそのところを取り外してこそ藤枝の教育があるのではないかと思う。

委員長　　私は大賛成です。私の大学は文科省の言う事を聞かない。大きな枠組みや法律は守りますよ。でも、縛られていたら未来はできませんよ。

C委員　　最初あたりは、はみ出た感じでドーンと、でも後ろは振興基本計画ですって感じで、あればいいのかなって気はしていますが。そのドーンと言う部分をどのように刺激を与えられるものにできるか。

委員長　　極端に言えば藤枝独特の教育振興基本計画ですよ。そして、教育振興基本計画は独特の計画を達成するためにどうしたらいいか。何が独特なのか？日本の教育者っていうのは独特の教育できないようになっているのですよね、考え方に文科省の縛りがあるから。あえて独特の藤枝モデル目指すと。そうするとみなさん定義していく必要がある。何を「当たり前」とするのか。

資料は上手くできていると思うのだけど、うまく表現できないけど地域の教育力を、もっとも充実させて、みんなで21世紀の新しい人材を育てるそういうことではないかと思うのですよね。

C委員　　それだったら、「地域の教育力」を書く順番をトップに持ってくるだけでも、かなり違うと思う。普通は学校、家庭で最後に地域となる。

みなさんおっしゃっているように藤枝は、すでに地域の教育力が高いわけだから、新しいことも大事でしょうけど、でも、やっぱり地盤があって実行できることは強みだと思う。書く順番変えるだけでもかなり違うかなと。

G委員　　順番は重要です。

委員長　　もう一つ、これをやれば他も波及的にいろんなものが変わるってものをやらなきゃ、それは何か。何かものを壊す時に、そこを壊せば全部が壊れるようなものがある。それは何か。

I委員　　私はF委員の言われた「遊び」っていう言葉はすごいキーワードだと思うし、E委員が言ったように遊んでいる暇はないくらいに結局塾行くわけでしょ。「遊び」は何かって突き詰めていくと何時間もの話になるので、それは横に置きますが。例えば、歩くのが縦軸の発達とすると、横軸の発達には歩く力を使って畦道も川の中も山道もデコボコ道も歩けること。横軸の発達は、豊かさの発達で

あり、それを「遊び」と表現している。そうした横軸の発達の中に人間関係とか我慢するとか社会性とかいろんなことを学ぶっていうことがあると思う。「遊び」なんて今更って言われるかもしれないけど、本当の遊びは子どもたちの中に凄く意味がある。

私も糸賀先生の「この子等に光を」ではなくて「この子等を光に」という発想転換はすばらしいと思う。特別支援って特別って言うほど特別なのかなって、前に委員長が「この言葉はどうなのだろう」って疑問を言ったように、そうした子ども達を中心に教育の実践が進むと、また全然違う豊かな人間観が生まれるのかなと思う。

委員長 21世紀の重要なテーマの一つは「遊び」です。我々は毎日遊んでいる。遊べるような社会がようやくできた。それをどういう風にもっと良く遊ぶかっていうのが大事です。今、一番遊んでいる人を言うと野球選手でしょ。エンターテイナーは遊んでいますよ。それから、東京に新しいタワー、スカイツリーができた。あれは遊びですよ。みんな真面目なことやらなきゃいけないと思っただけで、本来は、遊びを作っていくってことが文化とか産業とか喜びとか生活を創っているのです。本を読むっていうのは勉強だっただけで、読書は英語では「時間を潰す」とも表現する。

「遊びを教育にしていく藤枝市」ってすごいですね。でも、おそらく大部分の人が反対する。真面目にやれと。そういう人に限って、麻雀やったり、夜一杯飲んだり、楽しんでいるわけ、議会だっただけであんなぐちゃぐちゃして遊んでいるのですよ。彼らは「議論している」と言いますがね。

C委員 でも、「遊び」を教育振興基本計画に載せることで、みんなが教育って本当はなんだって考えるきっかけになればいいと思う。ただ、覚悟は必要だと思いますが。一石を投じたって意味では、その真面目に何かをやってくよりは効果はある。刺激っていうか。

「当たり前」の話が出ていたのは、「当たり前」もみんなが何となくわかっているけど、「当たり前」って実はみんなの考えが違ったってところを、藤枝で「当たり前」はこれだと一つ言うだけでも「えっ」ってなるかもしれない。やっぱりそういう刺激は、全てではないけど、この中に必要なのかな？

G委員 ここで我々が自由に発言して、それがいざ文章になって行政が作ったものとして広まっていった時に、行政が「当たり前」ってこういう事ですよって文章に載っちゃうと、余計なお節介になりませんかね。「当たり前」は人それぞれ違いますから。

僕ら学校の教師をやっていたので、何と云うか、この得体のしれない社会っていうものに対していつも憤りを感じている。マナーが悪くなったり、規範意識が低下しているのは、マスコミ全体も含めてですが。テレビでやっているものが当たり前ではないはずなのに、テレビから大量の情報が流されて、それを見た子どもや大人の基準が、とても緩く緩くなってきている。家庭は当てにならなくなってしまい、学校が最後の砦になってしまった。学校だけが口うるさく言って、スカートの丈の長さを測るなんてことまでしたわけですよ。そうすると学校は攻撃されるのですよ、そんなものは必要ないって。

僕はそういうことは家庭でやるべきことだと思いつつも、学校が砦にならなかつたらもっとひどくなってしまうから。高校生になると、マナーや意識の低下もひどい。その高校生の姿を見て中学生は育つわけですよ。

誰が悪いのかわからないけど、でも規範意識は緩くなり続けているので、どっかで誰かが言わなきゃいけないだろうとは思う。けれど、自分の家には高校生はいないから、高校生のスカートの丈を直すわけにはいかない。高校生には両親もいるだろうし、祖父母もいるかもしれないが、彼らは、子どもや孫に何も言えない訳で、当たり前のことやマナーとかを向上させるのは、非常に難しいけれども、何かをやっていけば広がっていくようなところを見つけて、それをやろうっていう委員長のおっしゃったことが大事になって。

H委員 合意形成の進め方をどうするのかというだけのことだと思います。藤枝市民が考える「当たり前」って1つも見つからなかったねって言ったら、それはそれでしょうがないと思うのですが。行政が押し付けているよって形をとらないようにすればいいですよ。会社の中でも、みんなで決めたことだから守ろうよって経営者やトップが独断で決めているわけではない。みんなで決めたことだからたとえば、エコアクションの事に対しては、みんなで決めた、会社としての「当たり前」だからやろうねって、それだけの話ですよ。

「市民総ぐるみ」でと言う時に、どういう風に合理形成していくか集約していくか意見を集めてそれを整理していくのか。それが押し付けられたって思われないうように、どういう風に作りあげているかって手法の問題だと思います。

G委員 マナーが悪いというなら、マナーの向上させるためにはどうしたらいいかの方策はあると思います。

でも、当たり前のことって、人によって意見が違うので、みんなで決めるのは難しいのではないですか。会社のように目的がハッキリしていれば、そのためにやらなくてはとなるけど。

ただ、このままでは良くないと思っっているという危機感みたいなものは、キ

チンと書いた方がいいと思います。それは、規範意識も緩くなっている、マナーも低下しているということをどうしたらいいかをみんなで考えていこうという問題提起をしたり、その為に地域はどうするか投げかけは必要。

委員長 例えばね、1つあると思うのは挨拶です。挨拶って言うのは、割合にみんなから賛同が得られる。挨拶が多くて笑顔が多いって言うのは、波及的にいろんなことに影響していくのではないかな。

H委員 それが当たり前のことなんじゃないですか。だから他のことをするといろんなものが改善化されていくっていう他のこと、挨拶も含めて、それが当たり前のことなんじゃないかな？

委員長 近所の静岡のバスに乗ったら、小学生や幼稚園の子は降りる時に「ありがとう」と運転手に言うので感心した。大人になるほど言わない。最近、自分もバスを降りる時に、ありがとうって言う。特別支援教室の子ども達も降りる時に「ありがとう」って言って降りる。

K委員 子どもは素直ですよ。始業式の時に子どもに話をしました、「今年一年みんなに頑張ってもらいたいことがある、挨拶をしましょう。ただの挨拶じゃないよ。『笑顔』で挨拶をしましょう」と。

委員長 「大人が笑顔で挨拶しましょう」と言った方が大きなパンチがあるかもしれない。

K委員 教職員に生徒の指導で大事にしたい事を聞くと、みんな必ず挨拶って言います。でも、良く見ていると先生の方が、気分が優れない時はそのままを顔に出して挨拶するし、こちらが挨拶してもスッて返す人が多いでしょ。まず大人からでしょって話ですよ。

委員長 僕の大学でも一番挨拶がダメなのは先生。私にもしない人がいるので、私の方からします。やっぱり大人たち、大人が悪いのであって子どもには全く責任はないと思う。子どもは大人を見て育っているわけですからね。藤枝市として「大人の教育もやっています」というのもいいかもしれない。

E委員 町内会で挨拶運動をやってみたらどうですかね。小学校とか中学校は挨拶運動みたいなものを行っているのだから、町内会で話合って決めればいい、大人

は必ず人と会った時に挨拶しようと。

委員長 静岡新聞の伊藤元重さんが書いていたのを見たのだけど、アメリカでは、町で知らない人に会っても「ハイ」って言われると書いてある。日本は、どうして言わずに知らん顔しているのか、いろんな人に聞いたら、違うと思われると困るからって、あの人なんか変って。「大人の教育やっています藤枝」がいいですかね。

C委員 挨拶をするとか、これになってこうなるとか委員長もわからないとおっしゃったけど、それなりにいいか悪いかは、別としてそこが見えてくるものが出てくると分かりやすいですよ。会社だと目的がハッキリしているから、その目的の為にこうなさいと言えば、みんなが心得るということならば、それが社会生活で無理だとしても、例えばですけど、大好きなミュージシャンのライブを見たいと思うと、みんな我慢して歩くとかあるじゃないですか。凄く限定的な場面ですけど、それやるといいことあるよみたいな、そんなことで釣るなどという意見もあるけど、そこが見えるようなところを何となく醸し出せるといいなって思います。

委員長 今の大人はしょうがないと思っている人多いじゃないですか？子どもには責任ないですよ。親が悪い。「今どきの若者は」って言う人には「その子はあなたが育てたのだからあなたの責任」と言います。それは責任転換ですね、自分だけは良くて子どもは悪い。

I委員 若い世代はその上の世代、おじいちゃんおばあちゃんの世代に責任があるって言います。

委員長 大人がまず挨拶しましょう。藤枝に行ったらみんな挨拶する。どう変わっていくかって言うと、藤枝にいる人が、みんなニコニコ笑顔になる。スマイルダウン活動ということも藤枝でやっているはずだから、それにも結びつく。

G委員 みんなで挨拶をしようなどは、反対意見はないと思う。これはいいと思います。挨拶を通して例えば地域の人とのコミュニケーションになるし、挨拶ができる様になれば、いろんなマナーも良くなる入り口として藤枝はすべての人に会ったら挨拶をする。この理論付や活動がどう広がっていくかをどこかに書いておけば、挨拶運動をやることの意味や、価値を認められるだろうし、バスの中でも挨拶しようとか道であつたら知らない人にも挨拶しようとかって細かい

ことまで含めて挨拶を通してモラルや規範意識を深めていこうと書けば少しは説得力が出てくるかもしれない。

I 委員 例えば、挨拶って言うのは他者と繋ぐという部分と、おはよう、おかえりなさい、おやすみなさいって声をかけてもらって嬉しかった子は、挨拶しようとする発達のフェイスができるわけですよね。頭で分かるけど大人の方が大変で、これだけお話している中で、あまり話すのが苦手の人にしたら苦痛。さっき言ったお話でいうと何かをやったらいいかなって思うのですが、「遊びで日本一」ってやった方がインパクトがあって、考えてもらえるかなって。

自分の子を育てる時から挨拶運動ってあってPTAの集まりに行くと、みんな挨拶しないのよねって言うのが話題になっていた。今も何十年たってもあまり変わってないなかで大丈夫かなって思った。

C 委員 挨拶のメリットをもっといえばよかった。「挨拶をしない」って言ってるんじゃないかって、挨拶することにどんなメリットあるのか、「挨拶する人は社長になれた」とか、「挨拶しないとダメ」ってやり方じゃなくて、「やっぱりいいな。」って思わせること。

委員長 私の学校では学生がよく挨拶します。何が始まりだったかと言うと、新聞でも取り上げられた。守衛さんが入ってくる学生に「おはよう」と挨拶する。そのうち、みんな真似するようになり廊下で会っても学生はよく挨拶する。お客さんにも「この学生はよく挨拶しますね」と言われた。誰かが教えたのではなくて守衛さんです。2年くらい前ですが、学生がその守衛さんを表彰しました。一人の守衛さんの単独行動でみんな挨拶できるようになった。

C 委員 その守衛さんのおかげで他の守衛さんも挨拶するし、また別に来た守衛さんも明るくなった。

委員長 それが別のキャンパスにも広まりました。だから、単純なことなのです。挨拶するようになったら人間関係も良くなってきた。コミュニケーションのきっかけができますから。

だから、そういう運動っていうのはありえますよ。市長が駅前立って毎月挨拶すればいい、それぐらいの勢いが欲しい。

J 委員 私の経験ですが二言挨拶というのがあります。「おはようございます」だけじゃなく。その後に「目が輝いているね」とか「今日は元気だな」って、必ずも

う一言つけたす。二言目が大事。褒める時もそうです、「えらかったね、そんなにやってくれたの」って事実を付け足す。そうするとね、どんどん子どもは褒められた喜びで次にはもっといいことをしようって少しずつなっていく、その経験を私はもっているのです。だから、「二言挨拶」・「二言褒め」っていうのをね、市民の皆さんで励行するというようにすればいいんじゃないですか。